第２回　仏教図書館協会研修会　〈講演〉

高野山の歴史

高野山大学長　和多　秀乗　教授

高野山へようこそお越しいただきました。平素は、仏教・哲学系大学会議、仏教図書館協会で、いろいろご指導・ご支援賜っておりますことを厚く御礼申し上げます。せっかく高野山へお越しいただいても、不行き届きな点が多々あるかと思いますが、どうか２日間、高野山の秋を満喫していただきたいと思います。

今、越智館長のほうから話がありましたように、高野山大学の電算化というのがなかなか進みませんで、やっと数日前にゴーサインが出たところです。皆さんの大学はおそらくかなり進んでいると思いますけれども、私のところは遅れて、今から出発ということになりました。

＊　＊　＊

きょうは、高野山の歴史について話をしろということですが、高野山の歴史をまんべんなく述べましてもおもしろくありませんので、１、２点かいつまんで申し上げたいと思います。高野山の歴史を調べるときに、私どもでは常識ですけれども、ときどき間違いを起こされる方があります。

一つは、弘法大師が大師号をちょうだいしたというのは延喜21年(921)です。もしも、それ以前の文書や資料で「弘法大師」と出ておりましたら、これはまゆつば物ということになるわけです。あとの時代にできましても、前に遡って書かれた文書・資料には「弘法大師」というのは出てきますけれども、それは、その成立の条件ということをみましたら、すぐわかることであります。ところが、古文書という形式をとりまして、偽物がよく出回ります。そのときに、ついうっかり、これは非常にいい文書だと言って利用されまして、学会の中で発表されて、一つの地位を確保された。ところが、私どもが見ますと、「これ、ちょっとおかしいんじゃないですか」ということになります。

かつて、赤松俊秀という京都大学の先生がおられまして、私も少し教えてもらったこともありますし、いろいろ高野山でお付き合いをさせてもらいました。そして、話のついでに、ある人の学位論文になりました論文の資料が、どうも弘法大師が入定されまして10年ほどたった、承和12年(845)にできました文書で、東寺関係の文書で、伊勢国の大国・川合荘という大きな荘園に関する文書があります。それに「弘法大師」うんぬんという形で出てくるわけです。そう言う時、私どもは絶対これは偽物という烙印を押すわけですが、それをご存じない方が、その偽文書をお使いになりまして論文をお書きになる、本にお出しになる、ということがあります。

そこで、あるとき、私どもの勉強会、弘法大師の研究会というのを作りまして、赤松先生にも入っていただいて、その研究成果は、後に『弘法大師研究』になって出たのですが、そのときの話し合いで、「先生、あれはちょっと間違いですよ」と言ったら、「なぜ」と、こういうことになりまして、話をしましたら、「しまった」ということで先生は非常にびっくりされまして、「高野山へ来れば常識なんですねぇ。つい私は気がつきませんでした」と言って、良心の呵責を感じられたようでした。そういうことがありました。

これは、私どもとしましてはなんでもないことなのですが、やはり、よその方からみましたら、そういうことはちょっとおかしい、という判断がなかなかしがたいというところで、ヨーロッパでも偽文書、即イシドール文書という定評のある文書がありますけれども、真言宗関係でも、又一般に宗教文書というのは偽文書が多く、高野山文書にもそういうのがあります。

＊　＊　＊

もう一つは、今からお話しようと思っております平清盛の文書であります。ちょっと話が長くなりますが、こういう話をいたしますのは、ちょうど霊宝館で後白河法皇の院宣が出ているという話を、きのう、霊宝館の方から聞きまし

て、私も、実はそれは見たい文書なのですが、その文書の後ろに署名人がずうっと名前を書き連ね、花押を書いているのです。その中に平清盛の花押があるのです。これは本物でして、「太宰大弐平朝臣」と出まして、清盛の書判が出てくるのです。これが天下に有名な平清盛の書判ということで、私は若い時分からそれを見てきたわけです。ところが、まったく違う書判が高野山に一つ残っているのです。あとで写真をお見せいたします。それも、実は高野山では「平清盛」と付箋が付いているのです。

ところが、後白河法皇の院宣に出ております平清盛の書判と、高野山に残っております、少し時代は下りますけれども清盛の文書の書判と、まったく違うものですから、それが日本で一つしかないということになりましたら、たいていの人は、これは偽物だという判定を下すのは当然であります。

そういうことで、平清盛に興味をもちまして、調べたことがあるのですが、その文書につきましては、まだ解答を自分で見つけだしておりません。今から、そういうことで、清盛と高野山に関する話をさせていただきたいと思います。

＊　＊　＊

高野山は、ご承知のごとく山の上にありますのと、それから、夏になりましたら雷様がよく暴れます。一番最初、正暦５年(994)という年に伽藍が落雷のために炎上し、次に、久安５年(1149)にもまた落雷のために火災があり、そのあと、４回ほど火災があるのですが、昭和元年12月26日に起きました火災は、おそらくロウソクか灯明の不始末で燃えてしまいまして、弘法大師以来ずうっと続いて守ってきておりました仏像、そういうものが全部、大正から昭和への変わり目に全焼いたしまして、せっかく千年守り伝えてきました重要な本尊さまがそこでなくなるという、そういう悲劇がありました。

これは人災でして、そのときの写真を手に入れましたが、その写真だけは、どこにも飾っておくわけにいきませんで、奥深くしまっております。例えば天保14年(1843)の大火のときには、木版刷りの伽藍炎上の絵が出ました。これは号外で出たのか、あるいは、そのほかの情報的なものとして出たのかわかりませんけれども、ちょうどＢ４紙１枚ぐらいの大きさに、燃えている大塔だけがかいてありまして、火炎だけがスッと朱の筆で２本ほどなすってあるのです。それを「高野山大火の図」と称しまして、ときどき骨董屋で売っているのです。それを手に入れまして、大事に置いておりますが、火事の絵図というのはあまり縁起がよくありませんので、しまい込んでしまっております。それを飾るわけにいきませんので。

そういうように、高野山は大火に見舞われるということが非常に多い。しかも、その原因の大部分が落雷であります。２回目の久安５年というのは５月であります。高野山の火事というのは、だいたい５月というふうに出てくるものですので、今も学生諸君とそういう話をしておりましたら、「先生、５月にはそんなに落雷はないですよ」と。「それは旧暦で、新暦に直したら７月になる。梅雨明けの雷さんだ」と説明するわけですが、久安５年の５月に２度目の落雷による火災が起きました。

このときは、幸いにも、仁和寺の高野御室覚法法親王という人が高野山におりました。覚法法親王は、しょっちゅう高野山で修行をしておりましたので、高野御室という名前で呼ばれております。白河上皇の皇子でして、この人が、「火事だ」という声で気がついて外へ出たら、伽藍のほうから火が出て、煙が出ている。そこで、輿に乗って見に行ったというのですから、やはり天皇の息子というのは贅沢なものだなと思いました。高野山へ行って出家していても歩かないのかなと思いました。それで、伽藍の南側へ来て、ちょうど通りになりますが、そこで見ていたら、「もし火の勢いがすごくなったら帰る所はないですよ」と言われて、慌てて東のほうへ行って見物したと。

普通は、大塔に落雷します。そのときも、大塔が焼け、金堂が燃えて、それから灌頂堂とか、そういった所が全焼するのですが、御影堂は残ります。御影堂は正暦５年の大火にも残るのですが、たいてい御影堂は残るのです。その間は、

だいたい２丈ばかりという、そういう近い所でも類焼を免れたという、そういう見物の記録をちゃんと残してくれているのが非常にありがたいのです。高野山の大火の記録というのは、そのときと永正18年(1521)の大火の２回限りであります。

＊　＊　＊

ところが、その覚法さんという人がいたおかげで、高野山の復興が非常に速くなります。覚法さんは、宗教界でやはり大きな力をもっておりますのと、政治の世界でかなり発言力があったようです。このときに、清盛の父親の平忠盛が播磨守をしておりましたが、忠盛が復旧工事を請け負った。これは、大工事を完成したら、そのあと、ちゃんとした要求を実現するわけです。播磨というのは大国ですので、播磨の国司の収入というのは莫大なものがあります。おそらく、もう一度播磨守に任じてくれというふうな交換条件で、これを、成功の重任と言いますが、忠盛は引き受けたのだろうと思います。

忠盛は金堂を１年で完成させました。昔の金堂というのは、２層の屋根でありまして、この金堂を完成するというのは、私も今、ちょっとお寺を細工をしているのですが、その準備から、上棟式から、竣工というふうな、そういう経過の時間を考えてみましたら、１年というのは非常に速いスピードだと思います。それは、覚法・鳥羽上皇といった人々の力というものが、また忠盛という、その当時、平家は新興勢力としてちょうど台頭期で、しかも、播磨守という、大変実入りのよい国の国司であったというようなことで、そういう力が寄り集まりまして、高野山の復興が速かったのだろうと思います。

ところが、その途中で忠盛が死んでしまう。死んでしまうとすぐ、清盛がそのあとを引き受ける。これは、おそらく清盛も魂胆があって引き受けたということになります。もちろん清盛も、『平家物語』を見ますと、かなり悪者に書かれておりますけれども、例えば藤原道長にしろ、清盛にしろ、強力な政治家というものも、一面から見ますと非常に信仰が深い。これは今の政治家どころではない、もっともっと信仰が深いという、人間としてはかなり優れた人物だろうというふうに思うのですが、そういう清盛が、今度、親の代わりに、高野山の伽藍の建築を請け負うということになります。

＊　＊　＊

その間、いろいろありますけれども、大塔が完成をいたしましたときに、大塔の曼荼羅の八葉の中尊を、自分の頭の血を出して、そして、それを絵の具に加えて塗ったという伝承があるのです。それは、美術史家が高野山へ来るたびに私はその話を出しまして、「本当かどうか」と問いましたら、「あれはひょっとしたら血かもわからないな」というふうな答えが返ってきます。今、ちょっと化学的に検査をしたらすぐわかるのですが、私はしないほうがいいと思います。やはりこれは宗教的な唱導の問題として伝承だけでおいておくほうがいいのではないかと思います。あるいは、ひょっとしたら本当かもわかりませんが。

清盛の製作した両界曼荼羅は、常明という絵師が描くのですが、その両界曼荼羅というのは、一つの重さがだいたい16貫もする大きなものでありまして、そういう清盛の所謂、血曼荼羅と称するものは、清盛が、やはりかなりの人物だったというしるしだろうと思います。そうして大塔が完成をいたしまして、高野山にそのままそっくり寄進される。

ところが、そのとき、大塔には、まだ大きな荘園が付いておりませんでした。そこで、その当時、高野山におりました法華房鑁阿という、これもまた得体の知れない怪僧がいまして、出身が全然わからない。いつごろ高野山に入ってきて、どういうことをして、どういう功績があって頭角を現したのか、ということはまったくわからないのですが、おそらく私は途中の出家者だろうと思います。それまで、どこかで大きな働きをしていた武士か、あるいは下流の貴族であるか、そういった人物だろうと思うのですが、法華房鑁阿という人が、あるとき、平清盛が亡くなった直後、平氏ゆかりの大塔において、平氏の怨霊を追悼するために、後白河法皇にお願いをいたしまして、法要をするために荘園を

くれと。荘園とともに、今、京都の高雄の神護寺にあります弘法大師ゆかりの高雄曼荼羅と称するものがあります。非常にすばらしいもので、その曼荼羅が京都の蓮華王院、後白河さんの一種の宝物庫、そういう所に置いてある。それもついでにください、それは平家の怨霊をなだめるためだ、ということで、後白河さんからまんまと高雄曼荼羅と、それから、ついでに播磨国の福井荘という荘園をもらってくるのです。

実は、その播磨国の福井荘というのも、もともとこれは高雄山神護寺の荘園であったわけです。ちょうど神護寺の文覚は、後白河法皇に直訴いたしまして、無礼を働いたというかどで伊豆に流されているわけです。文覚の失意のときに、ちょうどうまく法華房鑁阿という人は、本来、高雄山にあるべき高雄曼荼羅、これは後白河さんが持っていたわけですが、それと福井荘の荘園を２つとももらってきた。

それで、それを根本大塔領に付けまして、平家の追悼の法要をするとともに、多くの社会事業を始める。社会事業というのはどういうことかといいますと、たくさんの戦乱の被害者が高野山へ登ってきます。そういう人々を受け入れて、最期まで看取るような施設をこしらえる。この施設を高野山だけではなしに、伊勢国、あるいは岩清水八幡宮、あるいは河内の弘川寺とか、そういった各地にこしらえるのです。後に西行が出回った所をちょっと思い浮かべていただきましたら、ほとんどその中へ入っているわけです。

＊　＊　＊

社会事業とともに、平家の怨霊を追悼するためだ、ということで後白河さんからもらってくるのですが、ちょうどそのころ、文覚が帰ってくるわけです。ちょうどもらってきたとき、文覚は都に帰っていたのですが、まだちょっと謹慎の身で、精神的に弱みがあったのか知りませんが、黙っているのです。そのあとしばらくして、後白河法皇と文覚がすれ違うときに、文覚が後白河法皇と目礼を交わすところが出てくるのです。それ以後、文覚は再び後白河さんに近づきまして、「実は、高野山にやった高雄曼荼羅と福井荘、これはもともと神護寺のものではないですか。私は今から神護寺を復興するので、ぜひ返していただきたい」と、またこれは文覚一流の脅しで後白河さんが脅されて、そのまま高野山に断りなく、根本大塔領となりました福井荘、それから両界曼荼羅というものを高雄の文覚にやってしまうわけです。高野山までそれを取り戻しにくるときには、ちゃんと平氏の軍兵が来まして、ものものしい警護のもとに没収して帰るわけです。

＊　＊　＊

それを今度、高野山の法華房鑁阿が、綸言汗の如し、天皇がいっぺんそういうことを言って約束をまた途中で破棄するとは何事か、それなら交換条件ということで、これもまた脅しに行ったのだろうと思うのですが、後白河法皇の所へ行って新しい荘園をくれと直談判をいたしました。どこの荘園かというと、これは備後国の太田荘。太田荘を福井荘の代わりにくださいということで、後白河さんを困らせる。後白河さんも、太田荘という荘園の事情を考えましたら、これはもうやらなければしょうがないと思われたのだろうと思います。

備後国の太田荘というのは、最初は、平重衡が持っていた大荘園であります。東大寺を焼き討ちしました平重衡です。重衡は、太田荘を手に入れますと同時に、後白河さんを荘園の名目上の領主、本所という職を後白河さんに進呈をいたしまして、自分は、その土地の実際上の支配をする。ところが、平重衡が捕まえられて首を切られるわけですが、その重衡を捕まえたのが土肥実平。この土肥実平が太田荘を管理するわけです。土肥実平という人物は源氏の重臣なので、重衡の荘園である太田荘をそっくりもらってしまうわけです。それに目をつけた高野山の法華房鑁阿は、「あの土地をください」ということを後白河さんにお願いする。名目上の荘園領主は後白河さん。これは平重衡のときと同じでありました。そこで、後白河さんのもとへ行って、「平家の怨霊に悩んでいるあなたも、もともと平家ゆかりの荘園である太田荘を、忠盛と清盛の父子２代にわたって完成した平家ゆ

かりの高野山根本大塔領として寄進するのが、平家怨霊を追善するのに一番よろしい」という理屈で、高野山へもらって帰ってくる。これは非常におもしろい駆け引きがあったのだろうと思いますけれども、後白河さんをゆするとまでは言いませんけれども、そこまで後白河さんを動かして持って帰ってくるというのは、やはり着眼点が非常によかったと思います。そうして、文治２年(1186)という年に、備後国の太田荘は高野山の荘園になるわけです。

そういういきさつがありまして、今日の大塔というのは平氏と非常に関係が深い。だから、明日、霊宝館へ行かれましたら、後白河さんの院宣のあとのほうに、清盛の薄い花押がありますので、よくご覧になっていただけたら結構かと思います。そのように、高野山は平氏と密接な関係がある。その後、源氏との関係が出てくるわけです。その太田荘の後継者が土肥実平である。土肥実平を説得するには、まず、源頼朝を説得しなければいけない。そこで、鑁阿は源頼朝にも働きかけた。頼朝は、土肥実平に因果を含めて、「高野山へ寄付しろ」ということを言い渡すわけです。一方では、後白河さんも土肥実平に「おまえ、もうここまで来たら、太田荘を高野山に寄付しろ。もともと平氏にかかわりのある荘園だから」と、そういうこともあったのだろうと思います。

＊　＊　＊

この後、鎌倉幕府と高野山の関係は非常に密接になるわけでして、特に鎌倉幕府は金剛三昧院というお寺を造りました。明日行かれるそうですけれども、多宝塔、これも、石山寺の多宝塔に次ぎまして、日本で第２番目に古い非常に落ち着いた多宝塔。天気がよければ、その中を開けてもらいましたら、中の仏さまはおそらく、きのうおとといぐらいに作ったような見事な仏さまが眼前に現れますので、びっくりするようなお堂です。これは貞応２年(1223)ごろに作られました多宝塔です。金剛三昧院は、源頼朝をはじめ源家３代の供養の場所になっております。それから、その当時、秋田城介の役職にあった幕府の重臣の安達氏が親子３代にわたりまして住職ではありませんが、金剛三昧院に入りまして、高野山の僧侶の学問の奨励と、監視という、両面の任務で高野山にいたのです。霊宝館へ行かれましたら、高野版というのが出ております。高野山の出版物です。版木は今でも残っておりますが、それも安達氏が大きな功績の一つです。

あるいは、九度山の慈尊院から高野山へ登ってきます参詣道は、180町、５里ありますが、その180町の町石も、この安達氏が中心になりまして、勧誘をしまして完成したものであります。180町180本と、それから、１里、２里、３里、４里、５里という里石と、それから山上の36町でありますけれども、37本の町石が立っております。こういう道標というもの、これは文永・弘安のころにできたものでありますので、非常に重要なもので史跡となっていますが、これは、九度山の慈尊院の横に180町石というのがあります。下から順番に登ってくるたびに、町数が減ってくるわけです。増えたらかえって疲れると思うのですが、減ってくるからまだいい。引き算で登ってくるほうが山は登りやすい。

昔の人は、あまり山を登るのを苦にしておりませんで、例えば、北条政子が２度高野山へ登っております。登ってきますのは、源頼朝の庶子、貞暁が高野山におりまして、この人は、お母さんのおなかに宿った時分から北条政子に追いかけられまして、頼朝は自分の子供を腹心の部下に頼みまして、あちこち逃げ回るのですが、いよいよ危ないということで、京都の仁和寺へ入れるのです。仁和寺にも外護者がいるのですが、それも亡くなってくる。そこで、最後に高野山へ逃げてくるのです。高野山には行勝という、これまた怪物がおりまして、この行勝という人を慕って入ってくる。

ところが、高野山へ入ってきますと、北条政子はすぐにあとを追いかけてきまして、山麓の天野という所へ来まして、「出会いたい」と、こういうことになります。そこで、貞暁は、行勝と一緒に北条政子に会いに行くわけです。そうすると、北条政子は、「おまえは武将にならないか。還俗して源氏の跡を継がないか」と、

こういうことを言ったわけです。

ところが、貞暁という人はやはり肝っ玉がすわっておったのか、本当は一番将に将たる器であったのか、やにわに短刀を抜きまして、左目をえぐり取った。そして、自分は武士の世界に帰る意思はないということを政子に見せたというのです。そこで政子はびっくりしまして、びっくりしたというよりも安心をいたしまして、それ以後、高野山に対して非常に力を尽くす。哀れみをもったのでしょうが、それで、金剛三昧院の多宝塔建立とか、源氏３代の頼朝・頼家・実朝の納骨をしまして、供養の法要をする。

その上、荘園を非常にたくさん付けました。そこでも重要なことは、その荘園の収入をもって、いろいろな福祉の施設をこしらえた。山麓の天野という所に無縁の尼の生活費をみるだけの荘園を与え、建物を建て、定員60人で、その施設を経営した。そのほか、諸国でたくさんの恵まれない人を助けたというような記録があります。これは、先ほど言いました法華房鑁阿が、太田荘あるいはそのほかの荘園、その前は福井荘ですが、荘園の収入でもって、たくさんの恵まれない人の施設をこしらえた。というのと同じことをしたわけです。

これはやはり、この当時、宗教家というものは、僧侶あるいは寺院というものは、福祉活動をするのが当然でありました。幕府も同じことをします。朝廷も同じことをします。政府というものにとって、治山治水事業あるいは福祉事業は、やらなければいけない責務なのです。律令政府もそうですし、律令以前におきましても、例えば『日本書紀』などを見ますと、天皇というのは、しょっちゅうそういう福祉の政策を打ち出しております。これは当然のことです。

＊　＊　＊

だけど、僧侶はなぜそういう福祉事業をするのか、という問題があります。これはやはり自分の修行のためである。それはもう戒律である。戒律というと、普通、何々してはいけない、不殺生・不偸盗・不邪婬と。不殺生というのは、殺してはいけないけれども、殺すなという反対に、生かせということが入っているわけです。だから、戒律というものは、何々してはいけない、というように、十善戒とか、五戒とか、いろいろな種類の戒がありますけれども、皆、してはいけないということですが、戒も律も、やはり善いことをしろという面が、むしろそのほうが本質であるわけです。

例えば、皆さんも仏教系の図書館関係者ですので、ご存じのはずですが、七仏通誡偈というのがあります。これは、諸悪莫作(諸々の悪をなすなかれ)、衆善奉行(多くの善を奉行せよ)、自浄其意(みずからそのこころを清めよ)、是諸仏教(これ諸仏の教えなり)という衆善奉行なのです。悪いことをしてはいけないという次に、やはり善いことをしろと、これが本当のお釈迦さんの教えであります。悪いことをするな、だけではいけません。善いことをしなければ人間社会は成り立たないわけです。

律を見ましても、福田思想とか、看病とか、そういうことは律の一番重要なことになっております。今は、だんだん、そういう福祉事業というのは行政のほうに取られまして、お寺とか坊主はちょっと困る状態になっておりますが、本来は自分たちでやらなければいけない。

そういう基本精神を忘れているから、こういう羽目になるわけでありますが、鎌倉時代におきましても、やはりそういう仏教の根本精神、衆善奉行ということは忘れられていなかった。しかも、それが宗団とか、高野山のような大きな教団の根本の政策になっていたということが、金剛三昧院とか、あるいは法華房鑁阿という人の例からみましたら、よくわかるわけですが、これが中世末期までずうっと高野山の場合は続き、中世の末期でそういうことがなくなります。そういう事情があります。

＊　＊　＊

ところで、清盛ですけれども、実は、高野山にこういう文書があるわけです。これは活字になっているのですが、だけど、これはあまり信用されないのです。これは文書の小さい写真ですが、とても平安時代の字とは思われません。中世の終わりごろの字であります。そこに書判があるのです。これです。ちょっと伸ばしまし

たが。これを高野山では平清盛の文書といっております。どういうことが書いてあるかといいますと、「この度、大塔造立二世の大願成就せしめおわんぬ」。大塔を建立して、「二世の大願」。父、忠盛と自分との２代にわたる願いごとが成就した。「香花料のために」、お香や花を供える財源として、「安芸国の高田荘を寄進せしむるところなり。永代知行すべし。よって状すること件の如し」。文書の後半は、平安時代の言葉とは思えない。だけど、安芸国(広島県)の高田荘を寄付するという、そういうことです。

これは、平清盛の書判です。「太宰大弐平朝臣」と書いてあります。薄い薄い書判です。これは霊宝館に出ているそうですので、ゆっくりご覧になっていただきたいと思います。次に、この書判というのはまったく別なのです。従来は、これはまったくバカにされておりまして、高野山の偽文書ということで、問題にされておりませんでした。

ところが、実は『花押かがみ』というのを作りました皆川完一さんといいまして、東京大学の史料編纂所におられました方から山梨県の大善寺というお寺に高野山の偽文書と同じ書判の文書があるということを教えられました。その大善寺の文書は平安の終わりの文書に間違いなく、花押の横に、「平清盛」と、こう書いてあるのです。これはあとの人が書いたわけですけれども、平清盛の書判。清盛の文書だということです。その文書の内容というのは『平安遺文』に入っているのですが、あるお寺の僧侶が全部どこかへ出てしまった。それで、元へ返れというような命令であります。山梨県にこういうものがありまして、これは平清盛であるかどうかということの証明はまだできていません。それなら、中世の末期に高野山でこういう新しい文書ができたけれども、なぜ、高野山の人がこの書判を知っていたのか。現在、高野山と、山梨県の大善寺と、日本に２つしかないのです。

このことは実は、ずうっと昔から問題にしておりました。大善寺に近いうちに暇になったらいっぺんお伺いしまして、この文書をゆっくり見せていただいて、そして、それがなぜ平清盛であるというような説明がついているのか、そういうことから調べまして、そうして、事の次第をはっきりしたいと思っております。

＊　＊　＊

また、高田荘というのが高野山に入ったかどうか、ということも実ははっきりしないのです。いろいろな資料を見ましても、それはわからない。だけど、この文書は偽物であるとしても、高田荘が入ったとしても、これは決して不思議ではない。そこらへんまでははっきりするのですが、それ以上のことにつきましては、あまり強く言うことができない。だから、いまだにこういう宙ぶらりんの話をするわけですが、これは、やはり一つの偽文書か、あるいは模倣した文書のもつ意味というものの強みだろうと思うのです。もしこれが偽文書であったとしても、なぜこれが偽物であるか、なぜ偽物を作ったか、そういう意味が大切になってくるわけであります。

例えば、最初に言いました承和12年(845)の太政官布にあります伊勢国大国・川合荘を東寺に施入したという文書ですが、そこで「弘法大師」ということばが出てくるので、これは偽文書です。けれども、なぜ偽文書を作ったか。偽文書を作るには、やはり作るだけの理由がある。その理由を調べるということが、偽文書の研究の一番おもしろいところでして、偽文書は「偽文書だからだめだ」と言って捨ててしまっては、これは本当の歴史の研究にはならない。なぜそれができたか、それが出てきた歴史的な必然性があり、更に偽文書の効用というか、後々まで大きな働きをする偽文書があります。

＊　＊　＊

最後に、久安5年(1149)の大火のあと平治元年(1159)、ちょうど大火から10年たちまして、弘法大師の「御手印縁起」と称するものが、鳥羽上皇が大事にしておられた箱の底から出てきたということで、鳥羽上皇の后でありました美福門院の好意により、東寺の長者がそれをちょうだいして、高野山へ麗々しく持ってくるわけです。弘法大師の手印があるということで、それを「御手印縁起」というのですが、それは、平治元年になぜ突如としてそういうものを麗々

しく持ってきたか。

ちょうど大火のあと、高野山は経済的な理由もあって荘園をなんとか拡張したい。そこで「御手印縁起」には何が書いてあるかといいますと、弘法大師が天野の丹生都比売命から譲られた荘園は、実は応神天皇から譲られた土地だと。最初は、南の境界は海だということ、これは太平洋になるわけです。別の文書では、阿氐川荘ということになるのです。北の境は大和川、紀ノ川であります。東はどこまで、西はどこまでというふうに、高野山の寺領の四方の境が、その「御手印縁起」に書かれている。弘法大師がそこへ手印を押されているという、そういうものが平治元年に突如として出てくるわけです。そして、それが麗々しく高野山へ奉納される。高野山は、後にその文書を証拠文書としまして、朝廷に寺領の回復運動をするわけです。そうしますと、朝廷も放っておくわけにはいきません。高野山は寺領の復旧運動という論法で寺領の拡張運動をする。その拡張運動の典拠になったのが、その「御手印縁起」というものです。

ところが、『定本弘法大師全集』が、今年になってやっと完結をいたしました。10年ほどかかりまして、ちょうど私がその「御手印縁起」を担当しまして、「御手印縁起」の原本というものを見せてもらいました。今度、こういうものは隠しておくべきものではないということで、それを図版にして『定本弘法大師全集』に収めております。その中の解説に書いておいたのですけれども、弘法大師の御手印があるといっても、それは３人か４人の御手ではないか、そういうこと自体がおかしいと。

実は、そのとき、火事のあと慌てて復興運動に必要な収入を得るために、寺領荘園を拡張する、そこによって工事を完成したい、そういうために作ったのだろうというのが、これまで戦後の学者の定説だったわけですが、それと同じ内容のものが、御遺告という名前で昔からありました。安和元年(968)という年の奥書の写真だけが残っているのです。今、原本はないのです。原本は、桂湖村さんという人がお持ちでした。

東京大学にその写真がありました。一枚だけ、奥書の部分でした。それを見せてもらって、文化庁へ行きました。美術工芸課の濱田隆さんにお願いして、冒頭の部分と末尾の部分の写真を持っておりました。それを見せていただいきました。最初の文書が粘葉装であるということがわかりました。今残っておりますものはほとんど巻物なのですが、粘葉装であったことは転写が容易であったことを物語っています。

それから、文化庁のほうで、桂湖村さんの息子さんが東京のある高等学校の先生をしているということで本人に電話で聞いてもらいましたところが、「それはもうありません」と言う。おそらく、戦後の混乱期にどこかへ売り飛ばしたのだろうと思います。日本にあれば、またお目にかかることもありますけれども。桂さんという人は、同じ安和元年という銘のあります『成唯識論』まで、それは、その当時の重要美術品というものをお持ちになっていた。だから、かなり持っておられたのだということはわかりますけれども、そういうことで、結局は行方不明の侭で終りました。

高野山の大火のために焼けた伽藍を復興する、その目的のために作ったのだという偽文書も、よく調べると、もっと昔からあった。だから、後に成立した偽文書説は通用しない。要は根本の偽文書の検討が重要課題になってくるわけです。そういう偽文書につきまして、３点ほど、お話をいたしました。

偽文書というものがあると、それにはいろいろ曰く因縁がつき回っている、それがまだまだ解決は先のことだろう、あるいは、先がどうなるか、おそらく解決のメドは立たないかもわかりませんが、そういうたくさんの問題が高野山にある。だから、高野山の歴史というものは、知られていることよりも、知られていないことのほうが多いわけであります。つまらない話をいたしましたが、何かご参考にしていただきましたらありがたいと思います。どうも失礼いたしました。(拍手)(了)